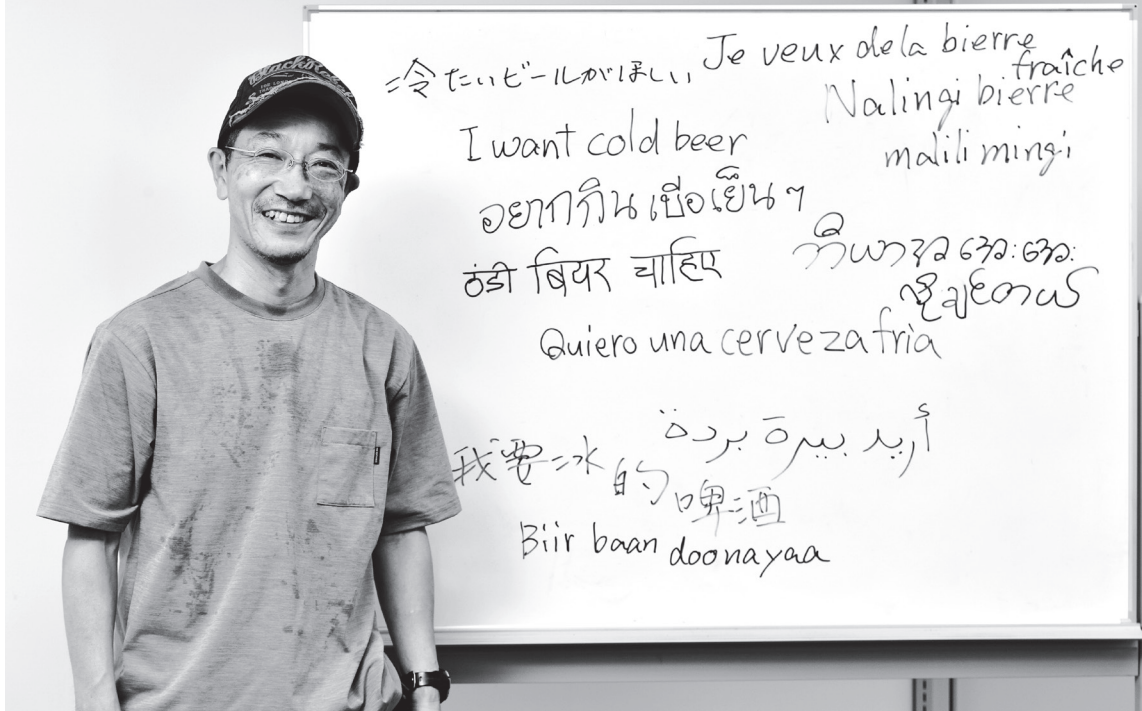


「冷たいビールがほしい」を上からフランス語、リンガラ語、英語、タイ語、ヒンディー語、ビルマ語、スペイン語、アラビア語、中国語、ソマリ語で書いた高野秀行氏。



## 語学は魔法の剣!

高野秀行

(ノンフィクション作家)

辺境へ深く分け入って、「誰も書かない本」を書くノンフィクション作家の高野秀行。

最新刊『語学の天才まで1億光年』ではそのユニーク過ぎる語学体験を綴っている。

辺境の地で語学はどんな力を発揮するのだろうか。

——二五以上の言語を学んだ言語オタクの高野さんも、大学一年生のときまで英語をほとんど話せなかったんですね。大学時代の初めての海外旅行で、偶然、ある世界的著名人に会ったものの、英語が皆目わからなかったがゆえに気づかなかった、という驚きのエピソードから、本書は始まります。

あれ、インドに行った初日だったんです。英語もわからないし、優しそうな普通の人という感じだったので、気づかなかったんですよ。で、僕のほうから記念写真を断ってしまったという……。後で誰かわかって、度肝を抜かれました。——その後、インドで大アクシデントに見舞われたことで、英語が上達します。(話したいことがあれば語学はできるようになる)と、確信を得てから、言語の沼にはまっていってわけですが、「話したい」がモチベーションの一つですか？

語学は、目的があつてやるものだと思うんですけど、なんとなくやる人がいてももちろんいいんですけど、目的があつたほうがたぶん上達しますよね。僕の場合は、コンゴ奥地の湖に棲むといわれるムベンベを探しに行くとか、世界屈指の麻薬地帯に行くとか、具体的な目的があるんです。その目的のためには、地元の言語を喋れるほうがいいだろうということで、学ぶ。ただ、目

的が達成されたり、あるいは達成されなかったりして終わると、急速にどうでもよくなって、忘れていくわけです。

どこに行くにも、その言語を少しは学んでおかないと気が済まなくなっています。僕にとって言語は、「地図」のようなものです。新しい土地に行ったとき、地図がなくても歩くことはできるけれど、地図があればその土地のことがよくわかるし、安心して深くまで入っていきますよね。言語は民族の地図だと思っています。

### 学べば学ぶほど、憧れから遠ざかって

——英語、フランス語、中国語といったメジャーな言語から、リンガラ語、ボミタバ語など、辞書もないようなマイナーな言語まで学ばれていますが、最初に習得したローカル言語がアフリカの「リンガラ語」。高野さんの言語人生を決づける体験は語学ビッグバンがここで起きます。

リンガラ語の前、フランス語を学んだ頃から、気配はあつたんです。アフリカのコンゴ人民共和国(現コンゴ共和国)へ行くために、公用語であるフランス語を学んだんですが、言葉ができる、取材をはじめ、いろんなことがうまくいくんですよ。思わぬ扉が開くという意味で、言

語って〈魔法の剣〉だなと思っていたら、リンガラ語ではさらに、喋るとウケる、という初めての体験をしてしまった。

言語って、マイナーであればあるほど、喋るとウケるんです。現地の人に驚かれ、喜んでもらえて、仲良くなれる。リンガラ語を少し喋ることで、僕はコンゴで人気絶頂を迎えてしまったんです。それまで地味な人生を送っていただけに舞い上がって、ローカル言語を話す醍醐味に完全に目覚めてしまいました。

ただ、「ウケ」には強烈な副作用があつたんです。まず、ウケればウケるほど、それはマイナー言語というわけだから、他に使い道がない。それから現地の言語って、場所によっては二つも三つもあるんです。だからネイティブの言葉を知らないとすると、学ばなければいけない言語がどんどん増えていって、自分の首を絞めることになる。言語をやればやるほど、憧れの「語学の天才」から遠ざかっていくという、悲しいことになりました。

### 「素人の表現は本物」「例文は自作」「法則を発見せよ」——高野流学習法

——〈探検の道具〉だった語学は、次第に、〈探

検の対象〉にもなっていくます。本書には、語学探検を重ねる高野さん独特の学習法が披露されています。「ネイティブに習う」は大きなポイントですね。

すぐに使える会話の練習をするには、ネイティブに習うのがいちばんいいですね。僕は、たいてい教師ではない、素人から学ばんです。素人の表現って本物だから、信用できるんです。

反対に、プロの言うことや、語学教室や教科書を信用しないクセが僕にはついていますね。大学の英語の必修授業で、面白いことがありました。イギリス人の先生が、日本人はよく“very good”と言うけれど、そんな言い方をしてはいけないと言っています。“very good indeed”と言うべきだとね。そうやって日本人が言う「よくない英語表現」をさんざん挙げた上で、最後に“This is very very important”と言ったんです。ここでもものすごく大きなことが学べたと僕は思った。要するに、公式には“indeed”がよい英語なんだけれども、そう教えている本人ですらつい使ってしまうほど、“very very”は日常的な表現だということです。

本にも書いた通り、僕もタイで日本語を教えていたことがあるので、先生の気持ちはよくわかるんです。公の場で教えようとする、ちゃ